はじめに

本講義はある程度現代文を勉強した人が私大最難関である早稲田大学合格レベルに達するための講座です。ですから、問題も講義内容も最高峰のものを用意しました。予習の段階で全くわからない問題があったとしても気にせずに講義で理解してください。すると、当初は難しいと思えた問題にも太刀打ちできるようになるでしょう。

五日間でみなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① **文法**
② **構文**
③ **論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ映像を見るだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして「記述解答」を書いてください。

夏期講習では「制限時間なし」でよいのですべての問題に解答して下さい。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。できれば、「その部分を解答の根拠とした理由」をメモ欄に書いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。

講義ポイント　**講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。**

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント	ポイントを踏まえ類題を解く。解答を書き直す。

早大　現代文　目次

第一講　「逆説」の読解①　……p.8
第二講　「否定」「条件法」「連言」「選言」の発展的読解　……p.26
第三講　「逆説」の読解②　……p.42
第四講　「差異」と「類似」の発展的読解　……p.54
第五講　「論理的読解」総復習　……p.70
巻末資料　読解法一覧　……p.82

第一講　「逆説」の読解①

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

この文章では、人間と人間以外の存在者の関係を私たちはいかに捉えうるのかという問いを、人間以外の存在者＝非人間の範例である「動物」と「機械」に焦点をあてながら探求する。人間に近しい動物たるチンパンジーや鯨、人間に近しい機械たるロボットや人工知能（ＡＩ）は、いずれも学問的探求と社会的関心の大きな焦点となってきた。これらの非人間と人間の関係性をそもそも私たちはいかなるものとして考えることができるのか。

動物、人間、機械の位置づけは混[a]メイを極めている。その証拠に、私たちはこの三項において等号と不等号の相互に矛盾する組み合わせを想定できる。例えば、近年「技術的特異点（Technological Singularity）」という概念と共に普及した「あらゆる知的能力において人間を凌駕する知能機械がいずれ現れる」という未来予測は、知的活動における機械と人間の同質性を前提とするが、知性の頂点をめぐって機械と人間がせめぎあう近未来の見取り図に動物が参与することはない（ A ）。一方、近代的思考の端緒となった機械論哲学においては、[1]外部から与えられた規則に従っ

てふるまうという点で動物と機械の同質性が措定され、理性的な人間精神がそれらの外部に位置づけられる（［B］）と同時に、人間の身体と動物のあいだに同質性が措定される（人間＝動物）。対して、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロが論じる南米の「パースペクティヴィズム」など、多くの非近代社会に見られる発想において人間と動物は「自己」や「魂」をもつ点で同質とされる一方で、道具や機械にそれらの特性が認められることは稀である（［C］）。全ての関係を一挙に表せば「機械＝人間≠動物＝機械≠人間＝動物≠機械」となり、三者から取り出される全ての二者関係に等号と不等号が適用されることになる。

　動物・人間・機械という三項の比較は、[2]比較を行う主体としての私たち人間が比較される客体でもあるという再帰性において特徴づけられる。どんなに客観的に三者の比較を行っているように見えても、そこには私たち＝人間における動物や機械との具体的な関係性が影響を及ぼしており、比較される対象同士の相互作用の変化に伴って比較のありかた自体が変容してしまう。私たちにとって、動物・人間・機械の関係性は常に［D］であると同時に［E］である。外側から三者を眺めることが可能であるように見なされる一方で、私たちは常に自ら比較の対象でもあるものとして残りの二者と相互に作用しあっている。以下では、動物・人間・機械と

いう三項の関係を、［D］／［E］な観点の併存に注目しながら考察していく。

まずは、動物・人間・機械をめぐる近代的思考の端緒となったデカルトの機械論哲学（動物＝機械説）について検討しよう。教科書的な説明において「デカルトは、動物や人間の身体を時計などの機械と類比的なものと見なすことで、諸存在は固有の目的や形相を実現する本性をもつとするアリストテレス自然学を否定し、機械と同じく客観的な法則に従うものとして自然現象を把握し解明する近代自然科学の基盤を築いた」とされる。こうした一般的な説明において、デカルトの議論は、機械と生物という比較対象の外部から人間（デカルト）が行った客観的な比較として提示される。一方、動物を含む諸存在の運動の原理をそれらがもつ霊魂や欲望によって説明するアリストテレス自然学は、自然界の現象を擬人化したものであり、[3]分析されるもの（自然）に分析するもの（人間）が誤って投影された、客観的でない主張として提示される。

これに対して、デカルトの動物＝機械説もまた、ある種の擬人化の産物として捉えられることを示したのがジョルジュ・カンギレムである。彼はまず、有機体と機械の間に類比性を見いだすデカルトの議論が、柱時計や懐中時計、水車、人工噴水、パイプオルガンといった十七世紀当時の先端

技術に依拠していることに注目する。これらの機械は、［F］といった人間の運動と密接に結び付いた旧来の技術に比べて、それらが円滑に作動しているときには人間の関与なしに自動的に動いているように見え、その限りにおいて自律的に動きまわる動物や人間身体と類比的な存在として現れる。だが同時に、これらの機械はその動力を――［F］ほど明示的ではないが――人間の働きに頼っており、特定の目的のために人間によって作られるものに他ならない。機械は、表面的には単体で作動するが、背後では、動力や目的や形態を機械に与える人間と常に結びついているという二重性をもつ。

　動物＝機械説は、機械の二重性を自然の事物に重ねあわせることで構成される。では、自然の事物において「機械を制作し動力や目的を与える人間」に対応するものは何か。一六六二年に出版された『人間論』の冒頭でデカルトは次のように述べている。「身体とは、できうるかぎりわれわれに類似したものにするために神がまったく意図的に形づくった土でできた像または機械以外の何ものでもない、と私は想定する」。この記述に基づいて、カンギレムは、動物＝機械説は次の二つの条件が満たされて初めて意味をなす主張であると言う。それは第一に、動物＝機械（「身体」）を制作するものとして神が存在することであり、第二に、機械の制作に先立っ

て生体がイデアとして与えられていることである。動物＝機械は、動力因としての神と形相因かつ目的因としての模倣すべき生体が先在して初めて生じる。

　このように、動物＝機械説とは、神による自然の制作を人間による機械の制作に擬えて把握するという概念操作の産物であり、アリストテレス自然学とは異なる擬人化の形式をなす。そこでは、[4]アリストテレスの目的論的な生命理解が放棄されているのではなく、目的論の位置がずらされているのだ。個々の生物の内部に設定されていた諸要因は神がそれを模倣して身体を作る生体のイデアおよび動力因としての神へと転置され、自然のうちにある合目的性が除去されることで、動物や人間身体をはじめとする自然物はそれに固有の目的や霊魂を奪い取られ客観的な規則に従う存在＝機械として把握される。こうした[5]理論上の「生命の機械化」を通じて、自然物や動物の技術的な利用が正当化される。カンギレムは、この発想が西欧人の典型的な姿勢の前提をなすと指摘した上で、それを次のように定式化する。

　人間は、いかなる自然的な合目的性をも否定する場合にのみ、また、一見して霊魂を有するように見える自然を含めて、自己自身の外にある自然全体を手段とみなすことができる場合にのみ、自分を自然の主

人にして所有者とすることができるのである。

デカルトの動物＝機械説は、その一般的な理解に反して、対象（動物・機械・人間）を外部から分析者（人間）が客観的に分析するような外在的な比較とは言い切れない。機械に関してはその製作者として、生物に関してはその一部として、人間（比較するもの）は比較される対象に内在している。だが同時に、デカルトの議論はこうした比較の内在性を捨象することで成立している。まず、機械に特定の目的や形態や動力を与える製作者たる人間の存在が捨象されることで、客観的な規則に従って自律的に動作する機械の姿が得られる。そうした機械と類比的な存在として生物一般を捉えることで、目的因・形相因・動力因が生物の内部から[b]シュウ奪され、製作者としての神へと移動する。そして、信仰と理性を通じた神との関係を通じて、人間の半身（「人間精神」）が生物の属する自然界から抜け出し、「自然の主人にして所有者」としての地位を獲得する。

端的に言って機械論哲学は、生命を機械と比較し、その余剰（「動物＝機械」ではないもの）として近代的な「人間」を浮かび上がらせる仕掛けである。人間の圏域（「文化」や「社会」）を自然の圏域から峻別することを可能にした点で、デカルトの行った概念操作はラトゥールの言う近代的な「純化」の端緒をなすものであるとも言えよう。自然の圏域から切り離

され「純化」されることで、人間は自然を客観的に分析しうる地位を得る。したがって、前述した教科書的な説明において自明視される「動物・人間・機械を外在的に比較する人間」とは、実際にはデカルトの議論の帰結として現れるものであり、議論の帰結を前提に置き換えることでデカルトが行った比較の内在性は[6]<u>不可視化されてきた</u>のである。

周知の通り、動物＝機械説における概念操作は二元論的な人間の分節化を導く。諸要因を欠いた動物＝機械の一種としての身体（延長）と、それらを手段として利用できる理性的な意志と判断能力を備えた精神（思惟）という区分が、人間的領域に導入される。クロード・レヴィ＝ストロースが論じたように、人類学の古典的な分析対象であるトーテム信仰が、環境に生息する種々の存在者たちとの関わりを媒介として自然種間の示差的格差と人間集団間の示差的格差のあいだに相同性を仮設することによって自然の体系に頼りながら人間社会の体系を確立しようとする営為であるならば、機械論哲学とは、環境に配備された様々な機械との関わりを媒介として自然のうちにある分節（自然種／神）と人間のうちにある分節（延長／思惟）の間に相同性を仮設することによって自然の体系を解析し利用し所有しうる人間的主体を構成する試みであると言えるだろう。非近代社会における「動物のトーテミズム」に対して、[7]<u>機械論哲学は近代社会におけ</u>

る「機械のトーテミズム」を確立する基盤となったのである。

両者のいずれにおいても、相同性は発見されるのではなく仮設される。トーテミズムにおいて社会集団間の差異はあらかじめ存在するのではなく、自然種同士の差異に擬えられることで生み出される。ダン・スペルベルが論じたように、「集団は社会的差異を表現しようとするのではなく、むしろ、それらを創出し、強化しようとするのだ」。「身体（延長）／精神（思惟）」という区分についても、より厄介なのは、両者がいかに結びつくのかという有名な問いよりも、そもそも私たち人間のあり方においてどこまでが身体的でどこからが精神的と言えるのかという問いである。動物＝機械説は、「自然種／神」の差異に基づいて人間における身体／精神という所与の差異を表現したものではなく、むしろ当の差異を創出し、強化することによって、後者の問いから人々の注意を逸らし、前者の問いを前景化させてきたのである。

（久保明教の文章による）

（注）トーテミズム……社会が種々の集団に分かれていて、ある集団が特定の種の動植物あるいは他の事物と特殊な関係があるとする信仰。

イデア……個々の事物をそのものたらしめている根拠である真の実在。

問一　傍線部ａ・ｂにあたる漢字を含むものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。
傍線部ａ　イ　共メイ　ロ　低メイ　ハ　メイ誉　ニ　感メイ　ホ　メイ運
傍線部ｂ　イ　シュウ慣　ロ　シュウ労　ハ　税シュウ　ニ　シュウ教　ホ　シュウ復

問二　空欄［Ａ］・［Ｂ］・［Ｃ］にそれぞれあてはまる記述として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。
イ　動物＝機械＝人間　ロ　動物＝機械≠人間　ハ　人間＝動物≠機械
ニ　機械＝人間≠動物　ホ　人間≠機械≠動物

問三　傍線部１「外部から与えられた規則に従ってふるまうという点で動物と機械の同質性が措定され」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。
イ　機械とは本来、人間が動物とは異なるということの証として作られたものであり、神という外部から見た時に同じ範疇に入るということ。
ロ　人間は外部からの影響を受けやすい存在であり、本能的な動物としての側面と有機的な機械としての側面がともに作動するということ。
ハ　外部からの規則とは重力のようなものであり、地球上に存在する限り、動物も機械もその影響から脱することは不可能であるということ。
ニ　動物は人間の指示に関わりなく、本性や本能によって自由自在に動きまわり、機械もまた人間の関与がなくても自動的に動くということ。
ホ　機械も動物も、客観的な法則に基づいて作動する存在であり、固有の霊魂や欲望を持って自律的に作動する存在ではないということ。

問四　傍線部２「比較を行う主体としての私たち人間が比較される客体でもあるという再帰性において特徴づけられる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、比較の対象になっているので、その分析を行う人間の考え方が否応なく結果に反映されたものになるということ。

ロ　動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、元来、動物から進化し、機械を創出した存在なので、前提として一定の優位を占めることができるということ。

ハ　動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、あらゆる知的活動の拠点となるので、機械や動物について考える時にはまず、人間の思考に戻るということ。

ニ　動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、神を想像の中で創り出したので、神を動物や機械の造物主と捉える思考を問い直すことから始めるべきだということ。

ホ　動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、理性を失えば動物や機械へと変容する可能性を秘めているという前提を理解した上で、議論を進めるべきだということ。

問五　空欄［Ｄ］・［Ｅ］に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　相同的／対比的
ロ　根源的／遡及的
ハ　外在的／内在的
ニ　近代的／古典的
ホ　有機的／無機的

問六　傍線部３「分析されるもの（自然）に分析するもの（人間）が誤って投影された、客観的でない主張」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　人間から見た自然というのは、人間本位の一方的な価値観に基づくものであり、自然から発信されている多様なメッセージに対応しきれてはいないということ。

ロ　自然と人間との関係は、人間の側から分析を試みることしかできないという限界を内包しており、両者を比較検討する視座を設定することが重要であるということ。

ハ　人間は思考の根底に対象を擬人化して捉えるという習性を備えており、そうして人の特性や活動になぞらえられた自然は、本来の機能を過小評価されるということ。

ニ　自然界の現象にはそれぞれ自律した意図や目的があるという考え方は、それに向き合う人間が自らの感情や思考をそれらにあてはめているにすぎないということ。

ホ　人間は本来、自然の一部であるという謙虚な姿勢を欠いた分析は、自然を捉える際に人間が自然界に及ぼしている影響を見落とすという問題を内包しているということ。

問七　空欄 F （二箇所）に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　帽子や手袋

ロ　馬車や牛車

ハ　稲作や焼畑

ニ　斧や梃子

ホ　望遠鏡や虫眼鏡

問八　傍線部４「アリストテレスの目的論的な生命理解」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　人間は動物の一部ではあるが、自らの意志をもって生きているのであり、自然界における相互作用から超越しているということ。

ロ　自然界に生息するものにはそれぞれ霊魂があって、固有の目的の実現を目指すのであり、人間の支配下にはないということ。

ハ　自然界の生物を、人間が創り出した機械と混同するのは意味がないことであり、その本来の生態に負荷をかけるべきでないということ。

ニ　デカルトは生物に生存の目的意識はないとしたが、アリストテレスは人間のみが生きる意味を問い直すとしたこと。

ホ　自然界の現象は、人間の認識によって擬人化され、あたかも人間がそうした現象に影響力を及ぼし得るかのように捉えること。

問九　傍線部５「理論上の「生命の機械化」」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　動物や人間身体は固有の目的や霊魂を有する存在ではないので、それらは所有され、分析・利用されてもよいという捉え方。

ロ　神による自然の制作という概念を導入することにより、自然の中の存在同士が連携しあって機械のように作動するという捉え方。

ハ　生命そのものを一つのイデアと想定する思考が、その集合体として神の存在を機械的に実証する可能性を持つという捉え方。

ニ　自然界での生命の循環には、それを認識する人間が不可欠であり、神の視点から見る時に人間の存在こそが自然を機械化するという捉え方。

ホ　神を目的因として想定するアリストテレスの思想においては、人間の精神もそれによって動かされている機械と変わらないという捉え方。

問十　傍線部６「不可視化されてきた」とあるが、何が不可視化されたのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　文化や社会を創り出してきた人間自体が、自然界に溶け込むことによって純化されたということ。

ロ　機械に生命を吹き込むのは人間のみに与えられた役割であり、人間は自然界から超越した存在であるということ。

ハ　現実の世界は、現象としての生命と物質としての機械とのせめぎ合いによって成立しているということ。

ニ　自然のうちにある合目的性を尊重することによって、人間が自然の主人にして所有者となるということ。

ホ　自然物と機械とを比較する主体である人間自体が、比較対象である自然界の一存在であるということ。

問十一　傍線部７「機械論哲学は近代社会における「機械のトーテミズム」を確立する基盤となったのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　自然や生物を扱う際に、それらが自律的に活動する事実を認め、そのメカニズムに客観的な法則性を見出す機械論哲学は、近代社会においてかつては信仰の対象であった自然や生物の固有の目的と霊魂を疑問視する科学的な思考を備えているということ。

ロ　自然や生物を扱う際に、それらが有機的に組織化された全体を重視し、分節化することが不可能であると捉える機械論哲学は、近代社会において人間が大規模に推進した自然破壊が、機械化による弊害の最たるものであるという信念を持つに至ったということ。

ハ　自然や生物を扱う際に、それらを計量可能な現象と見なし、人間による自然界の制御の方法を探究する機械論哲学は、近代社会において機械こそが自然や生物を理想化した存在であり、人間もまた理想化された自然の一部であるという確信を得たということ。

ニ　自然や生物を扱う際に、それらの有限性や相同性を説明するためにはすべてを数値化しなければならないとする機械論哲学は、近代社会において機械と人間のあいだに捉えどころのない特定の関係があるという考え方の起点になったということ。

ホ　自然や生物を扱う際に、それらを二元論的に分節し、また人間を身体と精神とに二元論的に分節することで自然界と人間の相同性を仮設した機械論哲学は、近代社会において有機体と機械を類比的に捉えることによって自然の利用を正当化するということ。

問十二　この文章の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　人間的領域を身体と精神に区分することによって、手段的に利用可能な部分が創出され、近代的思考が発展する契機となった。

ロ　自然界には人知の及ばない領域があり、近代以前の社会では、その解明の過程で「神」という存在が創出された。

ハ　トーテム信仰のある世界では、人間の能力の延長として機械が作られることは、「神」を模した行為として戒められていた。

ニ　人間精神の基盤は自然界で形成されるものであり、そのため人間は自然を支配するのではなく、共生を試みる義務がある。

ホ　筆者の考えるデカルトの機械論哲学は、アリストテレス自然学とは対照的に、自然界を客観的に分析する存在として人間を位置づける。

ヘ　人間は、自身に関してもどこまでが身体でどこからが精神かといった根源的な問いに明快な解答を出せているわけではない。

ト　アリストテレス自然学で述べられている「動物・人間・機械」についての考察は、近代における科学技術の進歩に貢献した。

（次ページより解答欄）

問一
a
b

問二
A
B
C

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

第二講「否定」「条件法」「連言」「選言」の発展的読解

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

印章と貨幣を考えてみよう。メソポタミアの円筒形の印章は、そこに刻まれている図を粘土板のうえに転がして、痕跡を残す。版の一種としていくらでも同じ像を作り出すことのできる、最初の複製技術である。印章はひとつひとつ異なる。その痕跡のもつ価値は、その印章からしか生まれないというところにある。

いっぽう、ある物体が貨幣として機能するには、物理的な質と量が認められるだけでは十分ではない。1物体は交換されてはじめて価値をもつ。動物や貝などが通貨として使われる場合でさえ、それは人間の手から別の人間の手へと渡らなければならない。メソポタミアの印章や粘土板、そしてギリシアやローマの貨幣は、イメージの遍在性を考えるうえで重要なヒントを含んでいる。

印章は確かにそこに刻まれているひとつのモチーフを無限に転写することができるが、その持ち主の使用の範囲によって限定される。ふつう印章は、それを転写する人間と一義的に結びついている。形式的には署名と同

じものと見なされているのは現代と変わらない。

それにしても情報化時代になぜ印鑑が使用され続けているのか、不思議といえば不思議である。歴史を知らない外国人のなかには、簡単にコピーすることのできる印鑑が、どうして署名と同格の扱いを受けることができるのか訝(いぶか)しがる人もいるだろう。

形式的に似てはいても、署名と印章は異なる。署名と捺印がセットになってきたことは、歴史的な文書に明らかである。文書は、書字とイメージがセットになって、つまり知的身ぶりに[2]象徴が伴うことによって、オーソライズされてきたのだ。

ギリシアのコインも、その初期には限定された地域で使用されていたと言われる。流通よりも象徴としての機能のほうが強く、鋳造されても特定の場所にとどまるケースもあった。[3]その初期にはまだ印章性を保っていた。

だがコインに刻まれた女神や皇帝の横顔は、やがて広い世界を渡ってゆく。ローマ帝国の初期には、ギリシアのコインが受け継がれて使用されていたが、貨幣に刻まれたイメージは地中海世界へと拡がっていった。今日わたしたちが「マネー」と呼んでいるものの本質は、その過程で備わったものである。

マネーの語源が女神の名モネータにあることはよく知られている。モネータの横顔が[a]ホられたコインもあるところから、「お金の神様」と思われることも多いが、もともとモネータは福や富をもたらす神ではない。ローマのカピトリーノの丘近くにあったモネータの神殿には、度量衡の原器が納められていたと言われる。モネータは［A］の神様だったのである。ある物体が正貨として認められるための核心は、質量の保証にある。モネータの神殿はまた、行政文書の記録を預かる保管庫とも通じていた。物質を計る神は記録を管理する神、すなわち［B］を測る神だったのである。

　ローマ神モネータが計量と記録というふたつの働きを司るのは、そのギリシア名に由来する。それはギリシア神話では、記録の神として知られるムネモシュネである。ムネモシュネは芸術の神々ムーサの母として知られ、西欧の芸術に多様なインスピレーションを与えてきた神であるが、ローマ時代には別の顔を伴って、丘のうえに[b]クンリンしていたことになる。別の顔、すなわち土地の大きさや貨幣の重さを保証し、経済を安定させる神としての顔である。

　モネータが度量衡の神であると同時に、記憶の女神であることは、イメージの遍在性を考えるうえで興味深い。[4]記憶が集団的な行為となるとき、わたしたちの社会ではそれを記念と呼ぶ。記念物すなわち「モニュメント」

もまた、ムネモシュネやモネータと語源を同じくする言葉である。ローマのコインはギリシアのそれとは異なる歴史を歩んだが、そこに皇帝の顔をはじめとした帝国の系譜が刻まれている。貨幣は帝国がそのイメージを複製し流通させるための、重要な複製技術となっていった。

　このような女神の来歴が物語るのは、貨幣が価値であると同時に、イメージでもあるということだろう。それが資本となりいわゆるマネーとして地球の隅々に行き渡るのは、それからさらに時代を経てからだが、「資本の増殖」という現象は、すでにこのときに胚胎していたと考えてもよいかもしれない。

　これを貨幣の[5]モネータ性と仮に呼ぶならば、その性格は基本的に今日でも変わらず続いている。それはどの国であっても、通貨のデザインに端的に表れている。通貨のデザインが表すのは権力のイメージであり、国民国家を代表するイメージである。この点で、ＥＵの共通貨幣「ユーロ」のデザイン、特にその紙幣の図案は非常に特異なものであると言える。補助通貨、つまりコインについては加盟国がそれぞれ独自にデザインをしているが、紙幣のほうは共通である。この「共通通貨」の特徴は紙幣にある。

　各国の紙幣には、多くの場合、何らかの意味でその国を「代表する」とされる人の顔が印刷されているが、ユーロの紙幣にはそれがない。顔の代

わりに使われているのは建築物である。ギリシア人もドイツ人もそれがどこかにある建物だと[c]バクゼンと思っているかもしれないが、そうではない。[6]ユーロのデザインは、世界中どこを探しても見つからない、架空の建造物を「顔」にしているのである。

発効してから十年あまりのあいだ、ユーロは幾度かの危機に見舞われてきたが、そのたびに共通通貨の矛盾が指摘されてきた。通貨は共通でも、財政政策はＥＵに加盟する各国に任されており、しかもそれぞれのあいだに深刻な対立が存在するからである。紙幣に描かれる建造物は、何であってもよいというわけではない。常識的には、その価値を保証する建物がそこにあるべきだろう。

共通通貨は歴史上幾度か創設されてきた。経済史でよく知られているのは、フランス、イタリア、ベルギー、スイスが中心となった「ラテン通貨同盟」だろう。一八六五年に発行されたとき、フランスの硬貨にはナポレオン三世の横顔がほられていた。

二十世紀がアメリカの時代だったなら、ＥＵは二十一世紀のローマ帝国を描いていたかもしれない。だが残念ながら、ヨーロッパにモネータの神殿は存在しない。ユーロという通貨には、未だに責任を負える建物がないのである。ユーロは基軸通貨かもしれないが、「顔」をもたないかぎり、

それは永遠に疑似通貨のままかもしれない。そのユーロを破綻の危険にまでさらしているのが、ギリシアやイタリアだという事実を、古代の神々はどう見ているだろうか。

いやそれは神々に失礼というものだろう。言うまでもなく問題はユーロだけのものでないからである。[7]マネーはグローバル資本主義そのものである。マネーの影響から逃れることのできる地域は、事実上存在しない。その遍在性は神々以上のものであり、それに比することのできるのはおそらくイメージだけだろう。人間が生み出したもののなかで資本とイメージほど強大になったものはない。その力、その速度、その自在性はますます増すばかりである。

[8]しかしユーロがどうなろうが、イメージと資本は加速度的にヨーロッパを変えてゆく。一九八九年の冷戦崩壊以前にはヨーロッパにはいろいろな風景があった。東欧では商品広告のいっさいない風景も珍しくなかった。ドライブインのメニューにも、それぞれの土地柄が反映されていた。

だがリスボンからベルリンまで、高速道路だけで行けるようになった今日、窓から見える景色にはどこか似た印象を受ける。あらゆるサービスが「チェーン」となり、同じカラーのホテルやレストランが大陸を覆っている。[9]EUは確かに「単一市場」となったのである。

高速を降りれば、さらに既視感は強まる。都市の中心街へ向かう街道沿いの光景は、看板の文字が違うだけでほとんど同じである。自動車販売、スーパーマーケット、家電の量販店……どこで見たのか思い出せないのは、同じイメージの広告が延々と続くからだ。そして中心街に入り、いちばんの目抜き通りに到着すると、既視感ではなく「すでにそこに来たことがある」という確信に変わってゆく。目抜き通りに建ち並ぶのは国際ブランドのショップであり、ウィンドウの中身は広告でよく知っている商品である。空港のトランジット・ラウンジのような風景。そこは確かに「すでに来たことのある場所」なのである。

　これはモータリゼーションとともに始まった「フランチャイズ化」の究極の姿と言えるかもしれない。[10]サービスとノウハウをパッケージにした経済は、ロゴに代表されるイメージを売ることによって、瞬く間に欧州全体を覆ってしまった。これを「イメージの経済」と呼びたい。現代世界ではイメージの経済が都市を作っていると言ってもいいだろう。

　たとえば世界中どこへ行っても、郊外に造られる住宅地は似ている。それは新興住宅地がフランチャイズ化されたサービスと一体化してデザインされるからだろう。家を買うことは、イメージの経済によって提供されたライフスタイルを買うことと直結するからである。フランチャイズ化され

た都市は次々に自己増殖を続けているから、やがて地球全体がそうなってしまうかもしれない。

　このような事態を支えているのは、言うまでもなくモータリゼーションと並んで現代世界を変えてきたモバイル化という現象である。かつては特定の土地と結びついて[C]していたものが、世界同時に[D]するというモバイル性の究極が実現しているということだ。

（港千尋『芸術回帰論―イメージは世界をつなぐ』による）

問一　傍線部ａ～ｃの片仮名を、漢字（楷書）で解答欄に記せ。

問二　傍線部１「物体は交換されてはじめて価値をもつ」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　他のものが持つ可能性を、その物体が無限に代替できるから。
ロ　物体そのものの使用価値は限定的だが、交換価値は無限だから。
ハ　交換されることで、物体が他の物体が持つイメージをも取り込めるから。
ニ　交換されることで、物体が印章とは違った複製性を持つようになるから。

問三　傍線部２「象徴」とあるが、何の「象徴」か。本文の語句を用いて五字以上十字以内で解答欄に記せ。

問四　傍線部３「その初期にはまだ印章性を保っていた」について、次の問いに答えよ。

（Ⅰ）ここで言う「印章性」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　印章が、契約を保証する徴となること。
ロ　印章が、実体を離れてイメージとなること。
ハ　印章が、複製技術と不可分の関係にあること。
ニ　印章が、ある人物と密接な対応関係にあること。

（Ⅱ）「印章性」が領土の拡大と結びついた状態を記述した一文を、本文から三十五字以上四十字以内（句読点を含む）で抜き出して、最初と最後の三字をそれぞれ解答欄に記せ。

問五　空欄 A と空欄 B に入る最も適当な語を次のイ～ヘからそれぞれ一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　過去　　ロ　形式　　ハ　尺度　　ニ　時間　　ホ　重量　　ヘ　本質

問六　傍線部４「記憶が集団的な行為となるとき、わたしたちの社会ではそれを記念と呼ぶ」とあるが、筆者がこのような説明を加えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　ギリシアの貨幣は地域限定だったが、ローマの貨幣は世界的に広く用いられたことを示すため。

ロ　貨幣が共通の価値を表すものと認識されることで、自己増殖的に価値を増してゆくことを示すため。

ハ　たとえばローマの皇帝は、帝国という集団を代表することで、世界征服が可能となったことを示すため。

ニ　記憶の女神モネータが一地方においてだけではなく、広く信仰されることで貨幣の価値を支えたことを示すため。

問七　傍線部５「モネータ性」を構成する二つの要素を示す語句を本文から抜き出し、それぞれ解答欄に記入せよ。

問八　傍線部６「ユーロのデザインは、世界中どこを探しても見つからない、架空の建造物を「顔」にしている」とあるが、このことを指摘することで、筆者はどういうことを暗示したかったと思われるか。その説明として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　ユーロというイメージに頼る通貨が、ヨーロッパとしての本質を奪ったということ。

ロ　貨幣は価値で、通貨はイメージだと言えるが、ユーロは価値よりもイメージが先行しているということ。

ハ　ユーロは理念だけがあって、それを通貨として保証する制度が弱いので、信頼性が十分確保できていないということ。

ニ　ユーロは二十一世紀の帝国を目指していたかもしれないが、古代の建造物のような、帝国を象徴する建造物を持ち得ていないということ。

問九　傍線部７「マネーはグローバル資本主義そのものである」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のイ〜ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　コントロール不可能だということ。

ロ　加速度的に価値を増していくということ。

ハ　各国の思惑が象徴的に現れるということ。

ニ　全世界を覆っていながらどこにも存在しないということ。

問十　傍線部９「ＥＵは確かに「単一市場」となったのである」という記述は文脈上ある効果を持っている。その表現上の効果をどう呼ぶか。本文にはない漢字二字の言葉を考えて、解答欄に記せ。

問十一　傍線部10「サービスとノウハウをパッケージにした経済は、ロゴに代表されるイメージを売ることによって、瞬く間に欧州全体を覆ってしまった」ことを、筆者は直後で「イメージの経済」と呼んでいる。「イメージの経済」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のイ〜ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　理念だけが先行した経済。

ロ　過去の理念を再現しようとした経済。

ハ　さまざまなものがパッケージ化された経済。

ニ　世界を一つのイメージで均質化してしまうような経済。

問十二　空欄 C と空欄 D にはどちらも「へんざい」と読む漢字が入る。それぞれ、楷書で解答欄に記せ。

問十三　筆者は後半部（傍線部８「しかしユーロがどうなろうが」以降）において、何を言おうとしているのか。その趣旨として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　ユーロ圏では郊外にブランド化された高級な新興住宅を作り出すなど、経済活動をイメージに変換することに成功している。

ロ　ユーロは通貨として十分安定していないのに、グローバル資本主義がやるべきことだけはやっていて、ヨーロッパの個性を破壊している。

ハ　ユーロによってヨーロッパは均質化され、さらにモータリゼーションの影響で、かつてのヨーロッパのイメージをどこでも見ることができるようになった。

ニ　ユーロ圏としてのヨーロッパは単一のパッケージによって開発するノウハウを持ったために、全世界を支配する帝国のような様相を呈するようになるだろう。

（次ページより解答欄）

問一

a
b
c

問二

問三

問四

（Ⅰ）
（Ⅱ）

〜

問五

A
B

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

C

D

問十三

第三講　「逆説」の読解②

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

まさしくレトリックの歴史は退却につぐ退却の歴史であった。その戦場は法廷・議場から、作家・詩人の書斎、学校の教室、研究者の書斎へとしだいに縮小しつづけた。そして十九世紀末から二十世紀の初めにかけて、確かにレトリックは一度死を宣告されたはずなのだ。もし教育制度の庇護を受けて学校で教えられていなかったら、レトリックの死はもっとずっと早まっていたことは間違いない。

人によってその判定は異なるとはいえ、レトリックの死は常に近代の始まりと関連づけられ語られてきたことは動かない事実だ。デカルト以来の近代合理主義・客観主義の要請にレトリックは答えられなかったのだ。合理主義と経験論は万人の共有する「理性」と「感覚」にとって「明証的」なものを真理と[1]ソテイした。合理主義者にとっては観念的実体が、経験論者には感覚的実体が、真理（真）として個人的な思惑とは別に、人間の主観の「外部に」客観的に存在する。この近代主義は「客観主義的実在論」と呼ぶこともできる。

真理は客観的に存在するのだから、その真理をありのままに提示すればよい。論証すれば足りるのであって、［Ⅰ］の必要はない。いわんや言葉を飾る必要は微塵もない。弁論術も修辞学も出る幕はないということになる。「理性」に叶うこと、それがすべてだ。たとえばイギリスの経験論者ジョン・ロックは言葉の［Ⅱ］の一つにレトリックを挙げて手厳しい非難を浴びせている。

「機知や空想は、無味乾燥な真理や事実の知識に比べてたやすく世に喜ばれるから、言語上の比喩的な話や諷刺が、言語の不完全もしくは［Ⅱ］と認められることはまずなかろう。が、それにもかかわらず、事がらのありのままを言えば、語順と明晰さを除くいっさいの修辞の技法は、すなわち修辞法の案出したいっさいの人工的で比喩的な言葉の使用は、ただ間違った観念をほのめかし、情動を動かし、これによって判断を誤らすだけであり、したがって実は完全な[2]ギマンなのである。」（『人間知性論』）

もちろんレトリックに対するこの手の反論はギリシア・ローマの時代からあったが、近代合理主義（実証主義＝科学主義）の[3]ハケンがレトリックの「［Ⅰ］」にとどめを刺したということは出来るだろう。

われわれが今さしあたり問題としたいのはレトリックの死亡診断書の作成よりは、なんだかんだと言われながらも一つの学科目（技術）がかくも

永きにわたってその余命を保ったということだ。二五〇〇年――今にして思えばそれは気の遠くなるような時の経過だ。人はその死に驚くよりもむしろその息の長さに思いをいたすべきだろう。

　この長寿はいったい何を物語っているのか。

　人は必要のないものをいつまでも保持するはずはない。保持するからにはなんらかの必要性をそこに認めていたのだろう。してみればレトリックは役に立たないといわれ続けながらも、人間の奥に潜むある種の要請（必要）には応えていたにちがいない。

　その要請（必要）とはいったい何か。それに答えるのはなかなか難しいが、それが人間の言語＝認識活動の根底に関わっているということだけは言えるだろう。さらに言えば、それは人間の理性＝意識の領野というよりは無意識のそれに関わっているらしい。だからこそそれはなかなか意識されにくく、それと指すことが難しい。

　これまでレトリックは弁論術としてであれ、修辞法としてであれ、いずれにしても人を魅惑し、[I]するための「技術」として位置づけられてきた。われわれが近い過去において見届けたものは、また今はっきりと確認しておかなければならないことは、技術としてのレトリックの死（無効性）であって、レトリックそのものではないということだ。この二つの

ことははっきりと区別しなければならないだろう。

　レトリックは世界（自己）を「語る」ための技術であるだけではない。世界を「発見する」ための方法でもある。世界を「読む」ための方法でもある。認識の型としてのレトリック、認識の枠組みとしてのレトリック。われわれが注目するのはそうしたレトリックの認識論的な側面である。それとはっきりと明示しはしなかったけれども、古典レトリックもその原型的なものを曲がりなりにも指し示していたことは事実なのだが。

　私たちの日常の発話は手垢にまみれた「慣用表現」からなっている。私たちは他人がすでに使った言葉を引用しながら、自分のおもいを表現する。ほとんどの場合はそれで十分に用は足りる。コミュニケーションにトラブルが生じたとき、あるいはコミュニケーションをより豊かに高めようとするとき、引用に工夫を凝らす。これが恐らくレトリックの始まりだろう。（イ）

　ところで、言葉というものは意外に融通無碍（ゆうずうむげ）なものである。ふだん結びつかないものでも強引に並べてみると何となくそれらしい意味を帯びてくる。「冷たさ」と「情熱」は常識的には矛盾する観念である。しかし「冷たい情熱」という言い方はある条件下では立派に通用するはずだ。小柄でも立派な活躍をした野球選手や力士について「小さな大投手」とか「小さな大力士」とか呼ぶことは実際におこなわれた。このような「 Ⅱ 」を

逆手にとった挑発的な言葉の使用を古典レトリックでは「撞着語法」（字句の単位）あるいは「逆説法」（文の単位）と呼んだ。（ロ）

成句や諺にもこの種の表現は実に多い。思いつくままに挙げてみれば、「慇懃（いんぎん）無礼」「負けるが勝ち」「逃げるが勝ち」［A］など。見られるとおり矛盾する観念の結合や常識を逆なでする提案の数々である。（ハ）

この例からも知られるように言葉の意味はおどろくほど伸縮自在で可塑性がある。もし言葉の意味が固定的であれば言葉の工夫を受けつけるはずがない。意味が流動的であり、伸縮可能であるからこそレトリックの出番もあるというものだ。言葉の「意味」の境界はファジーであり、おどろくほど弾力的である。「意味」は「星雲」、あるいは「氷山」にたとえることができるだろう。その境界のファジーさは、中心らしきもの（中心的意味）はあるが周縁にいくにつれて輪郭（含意的意味）がぼやけてしまう「星雲」を思わせる。その豊かな可能性については、姿を見せているのはほんの一部分（表層的意味）で実は水面下にその体積の大部分（深層的意味）が隠されている氷山を思わせる。意味世界はそうしたあまたの「星雲」や「氷山」の集合だとイメージできるのではあるまいか。（ニ）

「引用」の工夫、つまりレトリックとは「［Ⅲ］／深層的」意味の活性化の方法にほかならない。佐藤信夫のキーワードを借りれば「意味の弾性」

——これこそがレトリックの拠って立つ基盤である。[a]こうした言葉に対するしなやかなスタンスは「思考の弾性」、自由な発想とも連動している。（ホ）

　分かりやすい例を考えてみよう。たとえば現在われわれがごく普通に使っている「時は金なり」（Time is money.）という格言。この格言はベンジャミン・フランクリンのものと一般に信じられているが、その出典の詮索はともかく、産業革命以降の功利主義的考え方を見事に要約している。この格言はいわゆるメタファーで、時間をお金にたとえた表現である。これは単に時間とお金を比較しているにすぎないのだろうか。いや、そうではあるまい。時間に対する発話者の認識（姿勢）をも表明している。今でこそこの格言の新しさは気づかれにくくなっているが、当初は衝撃的だったはずだ。

　最初にこのメタファー表現を思いついた人の立場に身を置いてみよう。「時」（時間）と「金」（貨幣）という観念は確かにそれまでも存在していた。しかし誰もこの二つの観念を結びつけて考える人はいなかった。「時」と「金」はお互いに無関係にこの世に存在していた。つまりこの二つの観念の間には「類似性」は認められていなかったということだ。しかしある時まったく異質なこの二つの観念の間に「類似性」を感じとる人間がでてきた。もちろんそれは直接的な類似性ではない。直接的な類似性が問題に

なっているのならとっくの昔に誰からも気づかれていたはずだから。問題の類似性は言ってみれば「間接な」類似性である。

　時間は貴重なものではないのか。もしそうだとすれば時間は「貴重なもの」という点においてお金と似ているのではないか。もちろんこの推理は意識的になされたとは限らない。漠然としていたものが、ある日とつぜん「時間はお金ではないのか」という形で意識化されたのかもしれない。そのプロセスはどうであれ、それは今まで誰もが思いつかなかった関係の設定だ。それは新しい「類似性」の発見と言うべきだろう。要するに時間とお金の間にそれまで想定されていなかった「関係」が結ばれたということである。

　投げられた小石が大きな波紋を水面に描くように推理が広がってゆく。お金という観念の周りにはさまざまなイメージが揺曳している。それらのなかのいくつかのイメージが時間に投影（写像）される。いわばお金という「解読格子」を通して時間が解釈されることになる。その結果でてきた時間観念はそれまでとは違ったものとならざるをえない。

　とうぜん「時は金か」という反論があったはずだ。あくせくと働くことではなくて、のんびりと時間を過ごすことこそが幸福の極みだとする文化圏の人たちにとってそこに示された時間観は承服しがたいものだったろ

う。それは異質な時間認識である。時間は「貴重なもの」であり、無為に過ごされるべきではない。それはまたお金のように計量可能なもので、時給、日給、週給、月給というような形で支払われて然るべきものなのだ。「時は金なり」というメタファーは時間認識の変革でもあったのである。

［　X　］

　レトリックは世界をどう「表現する」かに関わるだけでなく、世界をどう「読む」かに関わる営みである。古典レトリックは話し手＝書き手の立場が優先していた。いかにうまく話すか、いかにうまく書くか、それが中心的な関心だった。無論それも大事な問題であるが、聞き手＝読み手の視点もそれに劣らず大切だ。現代レトリックは「世界／テキストを読む」認識者の立場を強調する。想像力を羽ばたかせると、この世界の事物間には思いもかけなかったような関係が結ばれることになる。それは新しい物の見方に通じる。

（野内良三『レトリックと認識』による）

問一　次の文は、本文中に入るべきものである。（イ）〜（ホ）から最も適当な箇所を選び、解答欄に記入せよ。

もちろん比喩的表現の限界を承知の上で言うのだが。

問二　段落［　X　］の部分に、次の文①〜⑤を適切な順序に並べて入れるとする。最も適当なものをイ〜へから選び、解答欄に記入せよ。

①　それも強力な手段である。
②　この意味ではレトリックは表現の手段にとどまらず認識の手段でもある。
③　現代レトリックはこうしたレトリックの認識論的側面に着目する。
④　レトリックはイメージに関わる営みであり、しなやかな感性が求められる。
⑤　それは理性的な認識というよりはむしろイマジネーションによる認識だ。

イ　③②①⑤④　　ロ　③⑤④②①　　ハ　④⑤②①③
ニ　④②①③⑤　　ホ　②①④⑤③　　へ　②①③⑤④

問三　空欄［Ⅰ］・［Ⅱ］・［Ⅲ］に入る最も適当な語句をそれぞれ次の中から一つずつ選び、解答欄に記入せよ。

Ⅰ　イ　誘惑　　ロ　論駁　　ハ　説得　　ニ　啓蒙
Ⅱ　イ　難点　　ロ　誤用　　ハ　未整備　　ニ　不勉強
Ⅲ　イ　流動的　　ロ　弾力的　　ハ　表層的　　ニ　周縁的

問四　傍線部ａ「こうした言葉に対するしなやかなスタンス」という表現が示す態度を説明している最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記入せよ。

イ　言葉の意味は伸縮自在で可塑性がある。そうした特性に注意することによって、近代合理主義で死を宣告された修辞法を再評価するという態度。

ロ　言葉の意味には一種の流動性がある。しかし、それを意識しすぎるとコミュニケーションにトラブルが生じることもある。その点に注意をするという態度。

ハ　言葉の意味には伸縮可能性があり、その境界はファジーである。そうした言葉の意味の特性に注意して、工夫しながら言葉を利用するような態度。

ニ　言葉の意味には星雲や氷山にたとえられるような弾性があると言えるが、それ自体が比喩的な発想である。そうした発想で議論できる柔軟性を養うという態度。

問五　空欄［Ａ］に入る例として**適当でない**ものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　有難迷惑

ロ　公然の秘密

ハ　急がばまわれ

ニ　損して得取れ

ホ　帯に短したすきに長し

問六　本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　言葉というものには流動性、伸縮可能性というものがある。それを利用した点で、レトリックは、近代合理主義の立場から厳しく批判され、一度死を宣告された。しかし、実は、その息の長さに思いを致すと、そこにこそ新しい物の見方に通じるものがあると言える。

ロ　レトリックは、世界をどう認識するかということに関わる営みでもある。その背景には言葉の持つ弾力性といったものが指摘できる。レトリックとは、近代合理主義の中で批判された、いかに効果的に表現するかという技術的なものだけではない。

ハ　古典レトリックは、いかにうまく話すか、いかにうまく書くか、を中心的な関心にしていた。しかし、そこには意義が見いだせない。ただ間違った観念をほのめかし、情動を動かし、これによって判断を誤らせるものとして批判されているからである。

ニ　言葉の「意味」の境界はファジーであり、おどろくほど弾力的である。近代合理主義からの批判はあるにせよ、技術としてのレトリックは、そうした言葉の性質を利用し、様々なメタファーを生み出す。こうしてできたメタファーは世界をどう「読む」かに関わると言える。

問七　傍線部1～3にあたる漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、解答欄に記入せよ。

1　イ　ソ質　　ロ　ソ状　　ハ　ソ先　　ニ　挙ソ

2　イ　詐ギ師　　ロ　ギ音語　　ハ　ギ惑　　ニ　ギ能

3　イ　ハ出　　ロ　制ハ　　ハ　ハ壊　　ニ　ハ持

（次ページより解答欄）

問一

問二

問三

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問四

問五

問六

問七

1

2

3

第四講「差異」と「類似」の発展的読解

次の文章は、大正九年（一九二〇年）に発表された寺田寅彦の随筆「自画像」の一部である（省略した箇所や表記をあらためた箇所がある）。これを読んで、後の問いに答えよ。

手近な静物や庭の風景とやっているうちに、描く物の種がだんだんに少なくなって来た。本当は同じ静物でも風景でも排列や光線や見方をちがえればいくらでも材料にならぬ事はないが、素人（しろうと）の初学者の自分としては、少なくも一わたりは色々ちがった物が描いてみたかった。一番描いてみたいのは野外の風景であるが、今の病体ではそれは断念する外はなかった。それでとうとう自画像でも始めねばならないようになって来た。一体自分はどういうものか、従来肖像画というものには［A］興味を感じないし、殊に人の自画像などには一種の原因不明な反感のようなものさえもっているのであるが、それにもかかわらず遂に自分の顔でも描いてみる気になってしまった。

それである日鏡の前に座って、自分の顔をつくづく見てみると、顔色が悪くて頬がたるんで眼から眉の辺や口許（くちもと）には（甲）メイジョウの出来ない暗い

不愉快な表情が泛(ただよ)うているので、描いてみる勇気が一時になくなってしまった。そのうちにまた天気のいい気分の好い折に小さな鏡を机の前に立てて見たら、その時は鏡の中の顔が晴れ晴れとしていて眼もどことなく活気を帯びて、前とは別人のような感じがした。それでさっそく一番小さなボール板へ写生を始めた。鉛筆でザッと下図をかいてみたがなかなか似そうもなかった、しかし構わず絵具を付けているうちに間もなく［B］人の顔らしいものが出来た。のみならず［C］いくらかは自分に似ているような気もした。顔の長さが二寸くらいで塗りつぶすべき面積が狭いだけに思ったよりは乙雑作なく顔らしいものが出来た、と思ってちょっと愉快であった。それでさっそく家族に見せて回ると、似ているという者もあり、似ていないというものもあった。無論これはどちらも正しいに相違なかった。

　このはじめての自画像を描く時に気のついたのは、鏡の中にある顔が自分の顔とは左右を取りちがえた別物であるという事である。これは物理学上からは極めて明白な事であるが、写生をしているうちにはじめてその事実が本当に体験されるような気がした。衣服の左り前なくらいはいいとしても、また髪の毛の撫(な)で付け方や黒子(ほくろ)の位置が逆になっているくらいはどうでもなるとしても、もっと微細な、しかし重要な眼の非対称や鼻の曲り

やそれを一々左右顚倒(てんとう)して考えるという事は非常に困難な事である。[1]要するに一面の鏡だけでは永久に自分の顔は見られないという事に気が付いたのである。二枚の鏡を使って少し斜めに向いた顔を見る事は出来るだろうがそれを実行するのは[丙]おっくうであったし、また自分の技量で左右の相違を描き分ける事も出来そうになかった。そんな事を考えなくてもただ鏡に映った顔を描けばいいと思ってやっているうちに着物の[注①]左衽(ひだりおくみ)の処でまたちょっと迷わされた。自分の科学と芸術とは見たままに描けと命ずる一方で、何だか絵として見た時に不自然ではないかという気もするし、年取った母が嫌がるだろうと思ったので、とうとう右衽に胡魔化(ごまか)してしまったが、[2]それでもやっぱり不愉快であった。

この自画像No.1は恐ろしく皺(しわ)だらけのしかみ面(づら)で上眼に正面を睨(にら)み付けていて、如何(いか)にも性急な癇癪持(かんしゃくもち)の人間らしく見えるが、考えてみると自分にもそういう資質がないとは云われない。

それから二、三日たってまた第二号の自画像を前のと同大の板へ描いてみた。今度は少し顔を斜めにしてやってみると、前とは反対に大変温和な、のっぺりした、若々しい顔が出来てしまった。妻や子供等はみんな若過ぎると云って笑ったが、母だけはこの方がよく似ていると云った。母親の眼に見える自分の影像と、子供等の見た自分の印象とには、事によったら十

年以上も年齢の差があるかもしれない。それで思い出したが、近頃自分の高等小学校時代に教わったきりで逢わなかった先生方の写真を見た時にちょっとそれと気がつかなかった。写真の顔が［A］若すぎて子供のような気がしたからである。よくよく見ているとありありと三十年前の記憶が呼び返された。これから考えると吾々の頭の中にある他人の顔は自分と一緒に、しかもちゃんときまった年齢の間隔を保持しつつだんだん年をとるのではあるまいか。

同じ自分が同じ自分の顔を描くつもりでやっていると、その時々でこのように色々な顔が出来る、これはつまり写生が拙（へた）なためには相違ないが、［B］面白い事だと思った。No.1にもNo.2にもどこか自分に似たところがあるはずであるが、1と2を並べて比較してみると、どうしても別人のように見える。そうしてみると1と2がそれぞれ自分に似ているのは、顔の相似を決定すべき主要な本質的の点で似ているのでなくて第二義以下の枝葉の点で似ているに過ぎないだろうと思われる。

これについて思い出す不思議な事実がある。［X］たしかに面白い問題になるに相違ないと思った。それからまた一方では親子の関係というものの深刻な意味を今更のように考えたりした。

一体二つの顔の似ると似ないを決定すべき要素のようなものは何であろ

う。この要素を分析し抽出する科学的の方法はないものだろうか。自分は自画像を描きながらいろんな事を考えてみた。同じ大きさに同じ向きの像を何十枚も描いてみる。そしてそれを一枚一枚写真にとって、そのおのおのを重ね合せて重ね撮り写真をこしらえる。もしおのおのの絵が実物とちがう「違い方」が物理学などでいう誤差の法則に従って色々に分配せられるとすれば、重ね撮りの結果は丁度「平均」をとる事になってそれが実物の写真と同じになりはしまいか。もしそれが実物と違えばその相違は書き手に固有ないわゆる[注②] personal equation を示すか、あるいはその人の自分の顔に対する理想を暴露するかもしれない。それはとにかく何十枚の肖像を大体似ている度に応じて二つか三つくらいの組に分類する。そうしてその一つ一つの写真を本物の写真と重ねてみてよく一致する点としない点とをいくつかの箇条に分かって統計表をこしらえる。こんな方法でやれば[3]「顔の相似」という不思議な現象を系統的に研究する一つの段階にはなりそうである。

　自画像はNo.2でしばらくやめてまた静物などをやっているうちに、一日、画家のT君が旅行から帰ったと云ってわざわざ自分の画を見に来てくれた。有り丈（あた）けの絵をみんな出して見てもらって色々の注意を受け、色々の面白い事を教わって大変に[丁]ケイハツされるような気がした。自画像の二

枚については、[A]色が白過ぎるというのと、もっと細かに見て、色や調子を研究して根気よく描かなければいけないというのであった。なるほどそう云われてみると自分の描いた顔は普通の油絵らしくなくて淡彩の日本画のように白っぽいものである。[D]鏡が悪いために実際いくぶん顔色が白けて見えたには相違ないが、そう云われて後に鏡と画と較べてみると画像の方はたしかに色が薄くて透明に見えて、注③上簇期（じょうぞくき）の蚕のような肌をしていた。そして如何にもぞんざいで薄っぺらなものに思われて来た。それからT君は色々の話のうちにトーンというものの大切な事を話した。眼を細くしてよく見極めをつけてから一筆ごとに新しく絵具を交ぜては置いていくのだそうである。ある人は六尺もある筆の先へちょっと絵具をくっつけて、鳥でも刺すようにして一点くっつけてはまた眺めて考え込むというのである。この話を聞いているうちに何だか非常に愉快になって来た。そういう仕事をしている画家と、非常にデリケートな物理の実験をやって敏感な螺子（ねじ）をいじっては眼鏡を覗いている学者と全く兄弟分のような気がして面白くなって来た、そしてどういう訳か急に可笑（おか）しくなって笑い出すとT君も一緒に笑い出してしまった。

それから二、三日経ってT君の宅へ行って同君の昔描いた自画像を二枚見せてもらった。それは小さな板へ描いた習作であったがなるほど濃厚な

絵具をベタベタときたならしいように盛り付けたものであった。しかし自分ののっぺりした絵と比べてみるとこの方が比較にならぬほどいきいきしていて真黒な絵具の底に熱い血が通っていそうな気がした。

D 考えてみるとこのくらいの事は今はじめて知った訳ではない。この自分の自画像がもし他人の絵であったとしたらおそらくはじめからまるで問題にならないで打っちゃってしまうほどつまらないものかもしれない。ただそれが自分の描いたのであるがためにこんな分かりきった事が分からないでいたのをT君の像を眺めているうちにやっとの事で明白に実認したに過ぎない。一体自分は、多くの人々と同様に、自分の理解し得ないものを「つまらない」と名づけたり、自分と型のちがった人を「常識がない」と思ったりするような事がかなりありそうであるが、幸いにあるいは不幸にして、自分の絵を一つの単純な絵として見て玄人（くろうと）のと比較する時に、自分の方がいいと思い得るほどの自信がないと見えて、T君の画と説とにすっかり感心してしまった。そうして頭を新しく入れ換えて第三号の自画像に取りかかる事にした。

注　①　左衽…ここでは「左前」と同じ着物の着方を指す。このような着方は、普通とは反対で、死者の装束に用いられた

ために、不吉なものとされた。

② personal equation…観察や判断において、個々人において生ずる誤差のこと。個人誤差。

③ 上簇期…養蚕業で、十分成長した蚕に繭を作らせるため、「蔟（まぶし）」と呼ばれる道具に移す時期のこと。

問一　二重傍線部甲・丁に該当する漢字を、解答欄に楷書で記せ。

問二　二重傍線部乙・丙と同じ意味の語として適切なものを、次のア〜オの中からそれぞれ一つずつ選び、解答欄に記入せよ。

乙　雑作なく

ア　適切に　イ　容易に　ウ　そっくりに　エ　上手に　オ　丁寧に

丙　おっくう

ア　至難　イ　退屈　ウ　面倒　エ　不愉快　オ　不利益

問三　空欄 A 〜 D に入る語の組み合わせとして適切なものを、次のア〜オの中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

ア　A　あまり　B　ともかくも　C　やはり　D　もっとも
イ　A　それほど　B　どうにか　C　やはり　D　よくよく
ウ　A　それほど　B　なんとか　C　そもそも　D　やはり
エ　A　あまり　B　ともかくも　C　それでも　D　まったく
オ　A　もっとも　B　なんとか　C　そもそも　D　まったく

問四　傍線部１「要するに一面の鏡だけでは永久に自分の顔は見られない」とあるが、これはどういうことか。最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

ア　二枚以上の鏡を使わないかぎり、ふだんは気づくことのない自分の新たな側面を発見することは不可能であるということ。

イ　自分の顔は、ふだん見ることができないために、鏡に映った姿を一瞬見た程度では、それと気づくことができないということ。

ウ　鏡のような道具を使った認識は物理学的には可能であっても、それらによって対象（顔）の本質をとらえることはできないということ。

エ　鏡に映った像は、自分の一面を映すに過ぎず、他の視点からの像と見比べなければ、自分の本当の姿に迫ることはできないということ。

オ　鏡に映った顔は左右が反転した別物だといってよく、自分の能力だけで微細な点までそれを補正し、正確な姿を認識することは不可能だということ。

問五　傍線部２「それでもやっぱり不愉快であった」とあるが、筆者がそのように感じた理由として最も適切なものを、次のア〜オの中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

ア　鏡を使って描くのは、自分の画力からしてやむを得ない手段ではあったが、それでは対象である自らの顔と向き合っていることにならないと感じられたから。

イ　社会通念や常識に従って描いてはみたものの、科学と芸術に対する自分の見方に照らして、観察した姿とはちがうように描いてしまったという気持ちが残ったから。

ウ　科学者としての自分に一定以上の自負を持ってきたにもかかわらず、自らが持つ科学的常識と社会通念や道徳とのあいだの矛盾を解消できないことに気づかされてしまったから。

エ　自分の感じる不自然さにしたがって、鏡に映ったとおりでなく、左衽になるように自画像を描いてみたものの、自分には似ていると思えず、自らの画力不足を痛感することになったから。

オ　鏡に映った通りを描いた左衽の自画像は、見たままに描くという自分の科学者としての姿勢からは必然的ではあるが、表情の非対称性ゆえに、やはり本来の自分との違いを意識させられたから。

問六　空欄 X には、次のア〜オの五文が入る。正しい順序に並べかえ、その順に記号を解答欄に記せ。

ア　ある時電車で子供を一人連れた夫婦の向い側に座を占めて無心にその二人の顔をながめていたが、固(もと)より夫婦の顔は全くちがった顔で、普通の意味で少しも似た処はなかった。

イ　このような現象を心理学者はどう説明するだろうか。

ウ　父親のどこと母親のどことを伝えているかという事は容易に分かりそうもなかったが、とにかく両親のまるでちがった顔が、この子供の顔の中で渾然(こんぜん)と融合してそれが一つの完全な独立な極めて自然的な顔を構成しているのを見て非常に驚かされた。

エ　そのうちに子供の顔を注意して見ると、その子は非常によく両親のいずれにも似ていた。

オ　それよりも不思議な事は、子供の顔を注視して後に再び両親の顔を見較べると、はじめ全く違って見えた男女の顔が交互に似ているように思われて来た事である。

問七　傍線部３「顔の相似」をめぐる説明として、最も適切なものを、次のア〜オの中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

ア　「顔の相似」ということは当たり前のことのように考えられるが、考えてみればよく分からない不思議な現象で、親子の関係に深刻な問題を投げかけるばかりでなく、何枚もの自画像を描くことによって、自己のアイデンティティの分裂といった危機をもたらすことになる。

イ　子供の顔を介して血のつながりのない両親の顔も似てくるという「顔の相似」に関する不思議な現象は、遺伝学など自然科学の研究ばかりでは説明がつかず、心理学などの方法も取りこみながら、系統的に行うことによってはじめて解明することができるようになり、自画像にかかわる問題も解決されることになる。

ウ　今日までのところ現代科学の方法では「顔の相似」ということを簡明に説明することができないが、これまで進歩を遂げてきた物理学と同様、この現象を統計的に研究することでその法則を把握することができるならば、自画像の描法を確立できるばかりでなく、人間の心理の解明にも大きく寄与することが可能となる。

エ　「顔の相似」ということは不思議な現象で、二つの顔が似ると似ないということを決定する要素が何かは分からないが、数多くの自画像を描き、その写真を重ね合わせることによってその「平均」をとったところに、自画像を描く人間の自分の顔に対する理想が暴露されることになる。

オ　自画像を描くことによって意識させられるようになった「顔の相似」という現象は、これほど発達した現在の科学でも充分に解明されていないが、それを考察するためには自然科学一般と等しく、比較と分類によって共通点と相違点を徹底的に洗い出して、統計的に処理することが必要である。

問八　自画像を描く経験を通して筆者が認識した内容として誤っているものを、次のア〜オの中から二つ選び、解答欄に記入せよ。

ア　両親の顔と子供の顔とは、表面的な枝葉の違いを超えて、つねに本質的な点で似通っており、そのことは、親子の絆の切り離しがたさを示しているということ。

イ　芸術家たちはつねに対象の全体を意識しており、科学者である自分の画が不十分なのは、細部の形やトーンばかりを追って、全体像を見ることがないからだということ。

ウ　トーンを軽視した絵画は薄っぺらであり、対象を観察しつつ、一筆ごとに絵具を重ねていった絵は、きたならしく塗りつけたように見えても、いきいきとしたものになるということ。

エ　芸術領域に属する画家の営みと、科学者である物理学者の営みとは、一見まったく無縁に見えるが、対象の観察と試行錯誤の繰り返しにもとづいているという点ではひどく似通っているということ。

オ　われわれが他人の顔に対して持っている印象は、その人の実年齢を反映しているばかりでなく、自分の記憶の中の印象をも反映しているということ。

問九　寺田寅彦は熊本の第五高等学校時代の英語教師から俳句の手ほどきを受けたが、その英語教師はやがて小説家となり、『吾輩は猫である』で「首縊りの力学」を説く水島寒月、『三四郎』では大学の実験室で「光線の圧力の試験」をする野々宮宗八のモデルとして教え子の寺田寅彦を使った。この小説家とは誰か、そのフルネームを漢字（楷書）で、解答欄に記せ。

（次ページより解答欄）

問一

甲

丁

問二

乙

丙

問三

問四

問五

問六

↓

↓

↓

↓

問七

問八

問九

第五講「論理的読解」総復習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「イメージ」とは何か。一般には、何かあるものを再現表象するのがイメージだと考えられよう。しかし私が考察したいのは、実在するものの形を写し取ったものというより、むしろ絶対的に失われたもの、「不在」そのものを表象したものといえるかもしれない。神によりこの世に送られたキリストは、かつて人として地上に存在したのだとしても、存命中の彼の顔かたちを写したイメージは存在しない。昇天後、その身体は失われ、この世の終わりに再臨するときまで、人は彼の姿を知りえない。とすれば「キリストの顔」を描いたイメージとは、オリジナルなき表象、「不在」それ自体の［　I　］といってよいだろう。

そうはいっても、キリストをかたどる絵画や彫刻は世界中に溢(あふ)れかえっているではないか――そう訝(いぶか)しむ声もあるにちがいない。それは確かだ。しかしこうした造形物の背後には、現世の人間の目には捉えがたい神的存在を形にするための論理と努力の歴史が横たわっている。偶像を否定するユダヤ教を母胎とするキリスト教にとって、イメージの制作や崇敬が擁護

されるには、乗り越えねばならない課題がいくつも存在した。聖なるものの不可視性や表象不可能性に挑んだ芸術家たちの営みは[1]タキにわたる。たとえば、「私は世の光である」（「ヨハネによる福音書」）という隠喩に基づいて、キリストを青白い光源や太陽に擬(なぞら)えて描いたり、光り輝き刻々と変容するその顔の不可視性を、芸術家の技ではなくガラスや金箔といった材質(メディウム)の力で示したり、あるいは現世における限定された「見神」を暗示して、キリストの顔を影のごとく暗く描くといった工夫などが思い起こされる。神を拝もうとするものを「アポスコペイン（遠くを見やる視線）」とともに描くことで、その絶対的距離、次元の違いを示す場合もあれば、ジョットの描いた天使たち（バロンチェッリ祭壇画チマーザ部分、サンディエゴ美術館）のように、神の輝きを直視できず鏡越しに近づこうとする表現も意味深い。[A]神的存在は、見ることの限界、表象の閾(いき)に宿るのだ。

［ a ］目にしえない、あるいは目にしてはならないものを見えるものにするというイメージのパラドクス。それはイメージの展示や演出とも無縁ではない。聖なるもののイメージは、見えるものとして造形化されたにもかかわらず、メデューサさながらときに目にしたものを失明させたり、天変地異を引き起こしたりすると考えられた。それゆえ、聖龕(タベルナクルム)（聖なるものを収める容器）やヴェールで覆い隠され、不可視のまま、ただそこに

存在するということだけが暗に示されることがある。あるいは、見るものに眩暈（めまい）を引き起こすようなまばゆい額に挿入されて、像そのものは暗く[2]コウタイし判別しえないかたちで示された。

[b] 十九世紀に大学制度のなかに生を享（う）けた美術史学が、芸術的価値をそなえるとされる作品をカント的な距離をもって客観的に分析することに心を砕いてきたとすれば、鑑賞者の心理や受容様態をも巻き込むイメージの問題は、ときに考察対象から逃れかねず、それらを十分に理解するには困難をともなう。芸術家の技巧を拒み、キリストの身体の「痕跡」に起源するアケイロポイエトス・イメージ（人の手によらない表象）や、それを忠実に複製することに意味をもつ「作者不詳」のイコンのあり方は、近代以降の「芸術」や「芸術家」という概念を前提にしていては理解することができない。しかも奇跡を起こし、信者を慰安し、ときには威嚇さえする、いわば [Ⅱ] イメージにアプローチするには、あらたな視座が求められよう。

　こうした対象に近づくために、私は、歴史人類学、あるいはイメージ人類学と称される研究動向へと視野を開くことにした。一九七〇年代頃から、西欧社会の価値体系や組織形態の相対性が認識されるにつれて、歴史学では、民族学（エスノロジー）や民俗学（フォークロア）、社会人類学や文化人類学のアプローチを参照しよう

とする傾向が高まり、それらとの対話に[3]リッキャクする「歴史人類学」と称される新たな方法論が模索されてきた。たとえば、中世史家ジャン＝クロード・シュミットは『中世歴史人類学試論』のなかで次のように述べている。

> 歴史家が儀典上の表象ないし慣行を理解しようとする場合に、中世ヨーロッパの神の表象に関連して、そもそも「宗教」という観念そのものは正しいのか。今日われわれが定義するような意味での「宗教」の観念は、われわれの文化が考え出した比較的新しい産物なので、十八世紀の啓蒙思想の時代より以前に遡ることはない。むしろ、人類学者のように象徴体系について語るほうがよい。それはつまり、一社会の表象と実践の全体に行き渡っている信念や神話や儀典のことで、今日われわれはそれらのあいだに[B]「経済」や「社会」あるいは「宗教」を識別する傾向が強いのだが、それこそ時代錯誤にほかならない。

［ c ］こうした議論を、美術史学における「芸術」の概念にあてはめても、あながち見当違いではないだろう。私が注目している多くの作品は、近代以降に遡及的に再定義された「芸術」という観点からは見過ごされかねないのだ。

さらにシュミットは、「人類学」という言葉で、[C]自らの文化の慣習と

価値から距離をとり、対象を理解するにふさわしい語彙や観念を意識的に探究する態度、しかも、個々の現象を、その内容ではなく、多くの表象と象徴的な行為の体系や諸関係を捉えることと考えている。つまり、「人類学的分析とは、身体、所作、象徴的器物、図像、祭儀の時や場が単に思想や神話を表現するのみならず、それらを組織し、存在させもする様態を解明する」ものなのだ。さらに作品とそれを取り囲む空間、そして受容者の反応も視野に入れて、D イメージが息づいていた場の様態そのものに目を向けることへも導かれるだろう。

［ d ］歴史学のこうした動向と並行して、美術史学においても、自らの学問領域を客観視すべく、従来の学の前提を問い直し、隣接諸分野との領域横断的な対話を重視する傾向が高まりをみせた。素朴な実証主義や歴史主義を反省し、「中立で透明な主体」、「自律的な作品」という「近代」的な認識図式や西洋中心主義的な価値観が見直され、［ Ⅲ ］反省を自らに課す動きがみられはじめたのだ。

［　　　　甲　　　　］

なかでも、狭義の「芸術」という概念を超えて、さまざまな文化におけるイメージ一般の価値や機能や力を捉え直し、像単体ではなく、受容者とのあいだで紡がれるインタラクティヴな関係や受容空間も視野に入れたイメ

ージ人類学的研究が囁（ささや）かれはじめる。社会的過程、礼拝儀礼、交換のメカニズム、神話の自己叙述をめぐる研究など、人類学が構築してきた概念は、イメージ（必ずしも芸術作品に限定されない）がいかに制作者や受容者に何らかの意味や力を伝達するようコード化されているのかを構造的に理解する可能性へと導いた。

（水野千依著『キリストの顔――イメージ人類学序説』による）

問一　空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る最も適切な語句を、それぞれ次の中から選び、解答欄に記入せよ。

Ⅰ　イ　理想化　　ロ　抽象化
　　ハ　現前化　　ニ　象徴化

Ⅱ　イ　「歴史」に根付いている　　ロ　瞬時に「変容」を繰り返す
　　ハ　「重量」感に満ち満ちた　　ニ　「生ける」存在としての

Ⅲ　イ　意味論的　　ロ　方法論的
　　ハ　超越論的　　ニ　解釈論的

問二　次の一文が入る最も適切な箇所を、本文の空欄 a ～ d の中から選び、解答欄に記入せよ。

このように聖なるもののイメージについて考えを巡らそうとすれば、わたしたちは、自ずと従来の伝統的な美術史の枠では捉えがたい現象と向き合わざるをえないことになる。

問三　傍線部Ａ「神的存在は、見ることの限界、表象の閾に宿る」の説明として最も適切なものを次の中から選び、解答欄に記入せよ。

イ　神的存在は、対象をそのまま写し取るというあり方を超えた、不在を表象しようとする場から生まれる、ということ。

ロ　神的存在は、何かを見えるように形象化する古典的な概念を壊すために、絶対的距離を伴って描かれる、ということ。

ハ　神的存在は、見てはならないものを表現するときに初めて現れるため、そこで用いられる材料が重んじられる、ということ。

ニ　神的存在は、見ることのあり方に再考を促し、世界を複雑で多様性に満ちたものとして提示する働きを持つ、ということ。

問四　傍線部Ｂ「「経済」や「社会」あるいは「宗教」」は何によって支えられているか。それを示す十字以上十五字以内のひと続きの部分を、傍線部Ｂより前の本文から抜き出して、解答欄に記せ。

問五　傍線部Ｃ「自らの文化の慣習と価値」の説明として最も適切なものを次の中から選び、解答欄に記入せよ。

イ　一定の型にはまった概念や思考の枠組
ロ　人間の精神に根差した普遍的な心の姿
ハ　文化は人間が作り出すと考える合理的な思考
ニ　それぞれの時代を反映した明快な文化特性

問六　傍線部Ｄ「イメージが息づいていた場の様態」の説明として最も適切なものを次の中から選び、解答欄に記入せよ。

イ　歴史のなかの一場面をイメージし体系化する思考法
ロ　表面的な現実に潜むイメージを生み出す機能
ハ　限りなく変容するイメージがあらわす世界の多様性
ニ　世界がイメージに満ちているという奥深い世界像

問七　次の三つの文を正しく並び替えて空欄　甲　に入れるとき、二番目に来るものはどれか。最も適切なものを選び、解答欄に記入せよ。

イ　さらに古典的な美的ヒエラルキーに基づく研究対象の措定が疑問視され、現代芸術をも射程に入れたさまざまな時代・文化圏の造形物を相対的に捉え、作品を媒介するメディアやテクノロジーの問題も注目された。

ロ　新しい美術史研究のモデルが人類学や社会学に求められ、社会的・文化的コンテクストにおけるテクスト＝美術作品のあり方を問う視点が前景化する。

ハ　加えて、作品よりも、作品記述や解釈といった美術史の言説自体を問い直すメタ美術史的研究も進められた。

問八　次の中から本文の論旨に合致しないものを二つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　「見えないもの」と「見てはならないもの」という性格を分析することで、単なる再現行為によって生まれる平板的なイメージを超える、新しい意味あいが明らかになってくる。

ロ　イメージの枠組を固定したものでなく、その輪郭を押し広げる形で考えていかないと、イメージの現代性は理解できない。

ハ　キリストの図像研究を新しくするためには、図像のさまざまなパターンを数多く集め、その関係性を明らかにすることが必要である。

ニ　生命を付与され、力をそなえた存在として、イメージを新しく捉え直すことが大切である。

ホ　現代注目すべきイメージは、その中心的な実体というより、歴史的・社会的な反映である付属物の存在によってこそ支えられているはずである。

問九　傍線部1～3のカタカナの部分を漢字に直せ（漢字は楷書で丁寧に書くこと）。

（次ページより解答欄）

問一

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

1

2

3

巻末資料　読解法一覧

読解法1　「文の構造」

文を読むときは「主部と述部」「修飾部と被修飾部」「接続部と文」という文の構造に気をつけよう。

《分析記号》
〈主部〉（＝とんがりカッコ）
［修飾部］（＝四角カッコ）
接続部　／（＝スラッシュ）　文

読解法2　「指示語・接続表現」

文を読むときは「指示語」と「接続表現」に気をつけよう。「指示語」があれば「指示内容」を捉え、「接続表現」があれば「前後のつながり」に注意する。また、本書では「論理的なつながり」を強調するため、「接続詞」「接続語」ではなく「接続表現」という表記で統一する。

《分析記号》
「指示語」　＝　○で囲む
「接続表現」　＝　○で囲む

「指示語」のカテゴリー

①「指示語」

前の名詞や説明を指す。

「これ」「それ」「あれ」指示語（指示代名詞）
「この」「その」「あの」指示語（指示連体詞）

②「一般化の指示語（まとめの指示語）」

前の具体例や詳しい説明をまとめる働きがある。指示内容は前に書かれている説明を幅広く捉える必要がある。

「このような」「そのような」「こういう」「そういう」

「接続表現」のカテゴリー

①「解説」

前の語や文や段落を詳しく説明したり、要約的にまとめたりする。

「つまり」「つまるところ」「すなわち」
「要するに」「畢竟」「結局」
↓要約的な言い換え

「言い換えれば」「換言すると」
↓言い換え

「言わば」
↓改まった表現（比喩表現・個人言語）への言い換え

②「例示」

前の内容の具体例を引いたり、一部を強調したりする。

「例えば」「言ってみれば」
↓読者の理解のための具体例をひく
「とりわけ」「なかんずく」
↓全体の中から一部を取り出して強調する

③「理由」

前の文に対する理由を説明する。

「なぜなら」「というのは（も）」　↓　評論文に多い
「けだし」「だって」　↓　小説文・随筆文に多い

④ **「帰結」**

前の文からの結果・結論を示す。（順接が多い）

「だから」「したがって」「それゆえ」
「ゆえに」「よって」「それで」
「そこで」「すると」「そして」
（因果関係がない場合もある）

⑤ **「転換」**

前の主張や主題を転換する。

「しかし」「だが」「ところが」「とはいえ」「さりとて」
「それでも」「それなのに」「それにしても」「けれども」
「けれど」
↓「主張」の方向転換（逆接）

「さて」「ところで」「閑話休題」
↓「主題・話題」の転換

⑥「付加」

前の内容に別の内容を付け加える。

「さらに」「しかも」「そのうえ」「加えて」
「また」「および」「かつ」
「だけでなく」「のみならず」
↓単純な付け加え

「一方、他方」「もう一方で」「他方で」
↓対照的な内容を付け加える

⑦「補足」

前の内容と反対の内容を補足する。

「ただし」「もっとも」

⑧「選択」

前の内容と後の内容のいずれか一方を選択する（両方の場合もある）。

「または」「あるいは」「もしくは」「ないし（は）」「それとも」

読解法3　「文の関係」

文を読むときは「同値（イコール）」「対立」「因果」「包摂（抽象具体）」という関係に注意する。「文の構造」「指示語」「接続表現」といった形式、および「言葉の意味」といった内容の両面から「文の関係」を捉える。

《分析記号》

① **「同値関係」**　A ＝ B
② **「対立関係」**　A ⇔ B
③ **「因果関係」**　A → B
④ **「包摂関係」**　A ― a’

読解法４　「レトリック（説得話法・修辞法）」

筆者は自分の主張を理解してもらうだけでなく、納得してもらえるように様々な方法を用いて工夫をしている。その工夫が「レトリック（説得話法）」である。文を読むときには「レトリック」に気をつけよう。

①「問題提起」

読者に疑問を投げかけて意識を誘導し、答えとして自説を述べる。「疑問文」があったら、そのあとに「答え」が来ることを予想しながら読もう。

> 《分析記号》　波線（？）をひく
>
> 「疑問文」→「◎答え（自説・持論）」

②「具体例」「体験談」

読者がイメージしやすいような例をあげる。また、実感を込めるために体験談をあげる。これらは筆者の主張を伝えるための手段なので、（丸カッコ）で括りながら常に「筆者の主張」を意識して読もう。

> 《分析記号》（丸カッコ）（具体例）で括る
>
> 「◎主張」→（△具体例、体験談）（具体例）→「◎まとめ」
>
> 抽象　→　具体　→　抽象

③「引用」

筆者が別の文章の筆者と対話しながら文章を展開することがある。二人で議論を進めることにより、論を深めるためである。引用は筆者の主張に対して「同意見」「反対意見」「根拠」「具体例」となるものがある。引用も（丸カッコ）で括りながら読んでいこう。

> 《分析記号》（丸カッコ）（引用）で括る
> （△引用）（引用）→「◎筆者の説明・解釈」

④「比喩」

内容のイメージを喚起しやすくするために別のものに喩える。

> 《分析記号》□ で囲む
> 「直喩」＝「ような」「みたいな」をつけて喩える
> 「隠喩」＝「ような」「みたいな」をつけないで喩える
> 「擬人法」＝人でないものを人に喩える
> 「類比」＝同じグループ内の別のものに喩える

⑤「譲歩」

一般論や反論に一旦は理解を示しながらも、方向転換をして自説・持論を展開する。譲歩も（丸カッコ）で括りながら読んでいこう。

> 《分析記号》譲歩（丸カッコ）で括る
> 譲歩（「確かに」「もちろん」「なるほど」「むろん」→△一般論・反論）
> 「しかし」「だが」「けれど」→◎自説・持論

読解法5　「論理フレームワーク」

筆者は自分の伝えたい内容を定義・整理・分類することで、内容を正確に相手に伝えようとする。あらゆる筆者に共通する整理の仕方が「フレームワーク」である。内容を正確に掴むためにも「論理フレームワーク」に注意しよう。

《分析記号》　○　で囲む

①「否定」のフレームワーク

Aではなく、（ではない。）Bである。
Aより（ではなく）むしろB。
Aのようで実はB。

※AとBが反対の内容になる場合が多い。
※Bに筆者の主張が来ることが多い。

②「条件法」のフレームワーク

AならばB（AはBである）。
Aの条件（前提、本質、基本）はBである。
Aは常に（必ず、絶対）B。
すべてのAはBである（全称文）。
AのためにはBでなければならない。
（AのためにはBである必要がある）。
BでないならばAでない。
B以外にはAはない。
Bのときのみ（だけ、に限り）A。

Bしてはじめて（してこそ）A。

※主張（命題）を表す。
※Aは十分条件、Bは必要条件を表す。
※「AならばB」の否定は「Aは必ずしもBとは限らない」である。
「AであってBでない」ような「反例」が挙げられる。

③「連言」のフレームワーク

AかつB。
Aさらに、そのうえ、加えて、B。
Aだけでなく、（だけではない。）Bも。
Aのみならず、Bも。
Aと（や）B。
Aつつ、ながら、同時に、ともに、B。

※Aという主張とBという主張が同時になされている。
※「AかつB」の否定は「Aでない、またはBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

④「選言」のフレームワーク

AまたはB。
AあるいはB。
Aもしくは、B。
Aないし（は）B。
Aか（や）B。

※Aという主張かBという主張のうちどちらか一方（または両方）がなされている。
※「AまたはB」の否定は「Aでない、かつBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

⑤「差異（対比）」のフレームワーク

AはXであるのに対し、BはYである。
AはXであるのとは異なり（違って、別に、逆に）、
BはYである。

※AとBの相違点を説明する。
※XとYは反対の内容になる場合が多い。

⑥「変化」のフレームワーク

Ａ から Ｂ へと変化する。
Ａ だったものが Ａ でなくなる。

※Ａ と Ｂ は反対の内容になる場合が多い。

⑦「類似（類比）」のフレームワーク

Ａ は Ｘ である。Ｂ も（また）Ｘ である。
Ａ と Ｂ はともに Ｘ である。
Ａ と同様に Ｂ も（また）Ｘ である。
Ａ と Ｂ は Ｘ という点で同じである。

※Ａ と Ｂ の共通点を説明する。

⑧「逆説」のフレームワーク

Ａすると、かえってＢ。
Ａと同時にＢ。

※ＡとＢは反対の内容になる。
※一見矛盾しているように見えるが真である。

⑨「因果」のフレームワーク

ＡだからＢ。
ＡなのでＢ。
ＡによってＢ。
ＡのためＢ。

※ＡとＢに因果関係がある。

読解法6　「論証」

筆者は自説を主張するが、その主張は読者にとって飛躍があったり、常識に反する内容であったりする。そこで、筆者は読者に納得してもらうために「論証（証明）」を行う。その「論証」を読むために「論証のフレームワーク」に注意しよう。

①単純な論証

A（○根拠）→B（◎結論）

※根拠Aから結論Bが導かれている。

②論証の連鎖

A（△根拠）→B（○根拠）→C（◎結論）

※主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

③結合論証

A（○根拠）＋B（○根拠）
↓
C（◎結論）

※主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。
※AかBかどちらか一方がもしないならば、この論証は成立しなくなる。

④合流論証

A（○根拠）　B（○根拠）
↓
C（◎結論）

※根拠Aだけでなく根拠Bもあり、結論Cが導かれる。
※AとBはそれぞれ単独でも根拠になる。

読解法7 「心情」

小説文や随筆文では登場人物や作者の「心情」が問われます。「心情」を捉える際にはその心情が発生する「原因」まで捉える必要がある。そこで、「心情」を捉えるための「因果関係」を「心情」のフレームワークとして覚えよう。

①単純な心情

原因	→	心情	→	結果
（事態、事情）				（行動、反応、発言）

※「心情」部分が書いてない場合は「原因」と「結果」から推測する。

②心情の変化

心情Ａ　→（変化）→　心情Ｂ
↑
変化の原因

※心情Ａから心情Ｂへの変化を捉える。
※心情Ａと心情Ｂは反対のものになる。
※「心情Ａ」「心情Ｂ」「変化の原因」の三点を捉える。

③結合原因の心情

原因Ａ（外的）
＋
原因Ｂ（内的）
→　心情　→　結果

※「原因Ａ」と「原因Ｂ」が組み合わさって「心情」が発生する。
※「原因Ｂ」は特殊事情であることが多く、「セリフ」「心中文」「過去のシーン」によって明らかになることが多い。

④心情の交錯

原因A → 心情A
　　　　　＋　　→ 結果
原因B → 心情B

※「心情A」と「心情B」が同時に存在する。

※「心情A」と「心情B」のそれぞれに「原因」がある。

※「心情A」と「心情B」は相反する心情である場合が多い。

模範解答

第一講「逆説」の読解①　解答

問	設問	解答
問一	a	ロ
	b	ハ
問二	A	ニ
	B	ロ
	C	ハ
問三		ホ
問四		イ
問五		ハ
問六		ニ

問七	問八	問九	問十	問十一	問十二
ニ	ロ	イ	ホ	ホ	イ・ヘ

第二講　「否定」「条件法」「連言」「選言」の発展的読解　解答

問一
a 彫
b 君臨
c 漠然

問二
イ

問三
印章を転写する人間。

問四
（Ⅰ）ニ
（Ⅱ）貨幣は〜った。

問五
A ハ
B イ

問六
ロ

問七
価値
イメージ

問八
ハ

問九
ロ

問十
皮肉

問十一
ニ

問十二
C
偏在
D
遍在

問十三

ロ

第三講 「逆説」の読解② 解答

問	解答
問一	ニ
問二	イ
問三 Ⅰ	ハ
問三 Ⅱ	ロ
問三 Ⅲ	ニ
問四	ハ
問五	ホ
問六	ロ
問七 1	ニ
問七 2	イ
問七 3	ロ

第四講　「差異」と「類似」の発展的読解　解答

問一	甲	名状
	丁	啓発
問二	乙	イ
	丙	ウ
問三		ア
問四		オ
問五		イ
問六		ア↓エ↓ウ↓オ↓イ

問七　オ

問八　ア　イ

問九　夏目漱石

第五講「論理的読解」総復習　解答

問	解答
問一	Ⅰ ハ　Ⅱ ニ　Ⅲ ロ
問二	b
問三	イ
問四	西欧社会の価値体系や組織形態
問五	イ
問六	ロ
問七	イ

問八

ハ
ホ

問九

1
多岐
2
後退
3
立脚

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。